

今月のことば

百年の長寿を生きるに勝るとき



今月は、大分県で医師をなさっている田畑正久先生の言葉をご紹介します。

田畑先生は大分県で300人も職員の抱える総合病院の院長をされていたことがあり、また一人の敬虔な仏教徒でもあります。『生と死を見つめて』などの著書を通じ、医師と仏教徒という二つの立場で、「生・老・病・死」の問題を問い続けてこられました。

医療関係者は医学の知識や技術を習得するのに忙しくて、仏教への関心は少ないものです。しかし臨床の経験を積むと、知識や技術だけでは患者の苦痛を救うことができない事実気づかされてきます。

癌の末期の人が「私はよい生活をしてきたけれど、本当に生きたことがない」とか「私は死ぬために生きているのですか」という訴えを医療関係者にする例があります。また緩和ケア病棟で自らの死を見つめて生きる人がいのちの輝きに気づき、イキイキと生きることができた例もあります。

どんなに医学が発達しても、いつかは「老・病」に捕まり100%死ぬ「私」という身。生老病死の課題、そして健康や長生きの課題も、医学の課題ではありますが、仏教的な世界への目覚めなしには本当は成就しないのです。

仏さまはこの私に「あなたは今、智慧のない生き方（仏法に出会わない生き方）をしているのではないか。そんなあなたに何とか智慧を届けたい。いのちのない生き方をしているあなたに何とかいのちを届けたい」と、はたらきかけて下さっています。

「小さな殻を出て、大きな世界を生きよ」と、今この時も呼ばれている、願われている。そして「いのちのない」今の私の姿に気付かされる。それは、百年の長寿を生きるに勝る瞬間ではないでしょうか。



医師である田畑先生が患者の心に寄り添うとき、
「最後は人間の知識を超えた仏教的なものでしか救われていかない」という確信を持たれていることは、仏法を学ぶ者として勇気づけられ、そして同時に大きな責任も感じます。

真光寺